

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720019

研究課題名（和文） チャリヤーパダ写本と南アジアの口頭伝承

研究課題名（英文） The Caryapada Manuscript and the Oral Tradition in South Asia

研究代表者

北田 信（KITADA MAKOTO）

大阪大学・言語文化研究科・准教授

研究者番号：60508513

研究成果の概要（和文）：ベンガル語を始めとするインド東部の諸言語による古い文献が、南アジア周縁に位置するカトマンドゥ盆地で保存されている。とりわけ仏教修行歌集『チャリヤーパダ』に記載されるアパブランシャ語・古ベンガル語の修行歌は、今日までカトマンドゥ盆地のネワール金剛乗仏教の僧によって受け継がれ、「チャチャー」歌として実際に演奏されている。ネワール人の伝承者をインフォーマントとしてチャチャー歌に関する聞き取り調査を行い、写本と口承の相互の関わりや、文献の伝承のあり方を解明した。

研究成果の概要（英文）：Texts written in the early forms of the Eastern Indo-Aryan dialects such as Bengali are preserved in the Kathmandu Valley situated at the margin of South Asia. Above all some songs in Apabhramsa and Old Bengali contained in the Caryapada and the Hevajrat Tantra have been handed down from generation to generation by the priests of Newari Vajrayana Buddhism and are still performed as ritual accompaniment called 'caca'. In this project, a Newari priest who hands down the caca songs was interviewed as an informant, and the mutual influences between manuscripts and oral tradition as much as the process of textual transmission were elucidated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,900,000	1,170,000	5,070,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：新期インド・アーリア語、ネワール、ベンガル、民族音楽、仏教タントラ、パウ
ル、アパブランシャ

1. 研究開始当初の背景

20世紀初頭にインド人の文献学者ラーフル・サーンクリティヤーヤンがネパールに調査旅行をした際、カトマンドゥの僧院において、『チャリヤーパダ』の写本を発見した。『チ

ャリヤーパダ』は密教（金剛乗仏教）の儀礼歌（チャリヤー）の歌詞を集めて記載したもので、新期インド・アーリア語東部諸語の最古の資料である。言語の特徴・内容からみて、これらの儀礼歌は9～12世紀にインド東部の放浪修行者たちが歌っていた修行歌が下敷

きになっていると推定される。

この種の放浪修行者とその修行歌の伝統は、今日でもインド東部の各地に残っている。そのよく知られた例は、ベンガル地方のバウルと呼ばれる放浪芸能集団である。バウルたちの演奏する修行歌の表現や内容は、『チャリヤーパダ』所収の歌詞に酷似しており、両者が同一の文芸伝統に属することを示唆する。バウルに関する文化人類学的研究は多く、また、バウルの修行歌と『チャリヤーパダ』の共通性についてもしばしば指摘されてきたが、実際にこのことを詳細に分析した研究は進んでいなかった。

もう一つの例は、カトマンドゥ盆地のネワール仏教徒が伝承する「チャチャー」歌である。ネワール仏教徒の最高階級であるヴァジュラーチャーリヤの僧侶たちは、金剛乗の秘密儀礼（チャクラ・プージャー）を實踐し、その際に「チャチャー」と呼ばれる儀礼歌を演奏する。この「チャチャー」歌は、『チャリヤーパダ』の儀礼歌に言語・内容ともに酷似し、実際に『チャリヤーパダ』第4歌や『ヘーヴァジュラ・タントラ』所収の金剛歌と呼ばれるアパブランシャ語の修行歌は、「チャチャー歌」のなかに取り入れられ、演奏されている。1980年代にベンガル人の仏教学者シャシブシャン・ダスグプタが、カトマンドゥ盆地の仏教僧院を訪れ、「チャチャー歌」の写本を筆写して、歌詞の校訂本を作成しようとしたが、作業の完成を見ず死去したため、「チャチャー歌」に関する研究は頓挫していた。

2. 研究の目的

『チャリヤーパダ』は、新期インド・アーリア語の最古の言語資料であるが、その重要性はそこにとどまらず、儀礼歌の作詩伝統が、ベンガルの放浪修行者（バウル）たちに生きた形で受け継がれ、今日でも演奏されていたり、また、カトマンドゥでは、実際に『チャリヤーパダ』が金剛乗の儀礼に伴って演奏されるなど、口頭伝承として生き残り、実践されている、という事実は、非常に意義深い。過去に書かれた文献を、現在生き残っている口承による演奏と比較することができるのである。『チャリヤーパダ』の歌詞に描かれる事柄を、現在の口承の演奏を見ることによって、かなりの程度まで知ることができ、また逆に、現在の儀礼実践において不可解な部分を、『チャリヤーパダ』を参考にして解釈していくことができる。写本から得られる情報と口承から得られる情報を合わせて見ることにより、片方を見ただけでは分からなかった事柄を知ることができる。以上が本研究が目的とするところのものである。

また、バウルの修行歌やネワール仏教のチャチャー歌演奏などの口承の伝統は、伝承者の高齢化および後継者の不足から、絶滅の危機に瀕している。また、文化遺産としての価値について、十分な社会的認知がなされているとは言い難い。これらの芸能について、海外から来た研究者が学術的な水準の調査研究を行い、国際的に発表していくことにより、これらの口承文芸についての評価が高まり、伝承者と彼らを取り巻く人々の間で、伝統芸能を保存しようという意識が高まることをも期待するものである。

3. 研究の方法

(1) インド・西ベンガル州の農村に伝承される民俗芸能・口承を現地調査する。『チャリヤーパダ』の文芸伝統は、バウルだけでなく、ベンガル地方の各地に伝わるさまざまな民間伝承に受け継がれているということが指摘されている。『チャリヤーパダ』所収の歌詞やバウルの修行歌は、“身体は小宇宙であり、身体の中に神は宿っている”という神秘思想的な内容を扱っている。この神秘思想はデホトット（“身体の実実”）と名付けられ、バウルの修行歌に限らず、ベンガル地方に伝わる他のジャンルの民謡においても扱われていることがある。たとえば北ベンガルの農村の女性が口承するトゥッカという民謡の歌詞の中にも、『チャリヤーパダ』やバウル修行歌に共通の表現が混入しているという報告がある。身体についての神秘主義的考察ともいえるデホトットは、一部の宗教家に限られた特殊な教義ではなく、ベンガル地方の一般民衆の間に広く浸透する思想であった可能性がある。農村のこうした口承文芸についての学術的な研究は少ないから、情報を得ようとするならば、現地へ赴き、実際に演奏を聴いて、記録するしかない。

(2) 「チャチャー歌」の朗誦は、まったく暗記した状態で行われるのではなく、歌詞を記載したノート（写本）を適宜参照しながら行われる。この目的で用いられたと思われるチャチャー歌集の写本がカトマンドゥ盆地に大量に保存されており、その多くはネパール国立古文書館およびアーシャー古文書館に保存されている。これらの写本をもとに「チャチャー歌」のテキストを分析する。

(3) カトマンドゥ市ムスンバハー寺の僧侶を訪ね、実際にチャチャー歌を歌ってもらい、これを記録する。秘伝の歌の録音は宗教的な理由から禁止されているので、実際にレッスンを受けて歌唱を習い、習ったフレーズを調査者の声で録音し、さらにそれぞれのチャチ

チャー歌が儀礼の中で果たす役割や、チャチャー歌にまつわる伝説など、チャチャー歌の背景について聞き取りを行った。

4. 研究成果

(1) インド・西ベンガル州バンクラ県およびプルリア県における調査により、農村に伝わるさまざまなジャンルの民俗芸能を記録（録音・録画）した。具体例をあげると、ヴィシユ派のクリシュナ讃歌、ベンガル語ヴァージョンのマハーバーラタ・ラーマヤナ朗誦、パラ・キールトン（音楽伴奏付きの一人芝居）、ジュムル歌（男性の集団が歌う）などである。『チャリヤーパダ』は、これらの様々なジャンルのベンガル語の歌謡の原型的な形式を反映すると考えられるから、これらの歌謡形式と、それらが持つ韻律形式、さらに歌謡と韻律との絡みを実地に観察できたことは、『チャリヤーパダ』がもともとどのように演奏されていたか、ということの把握するための重要な手掛かりとなった。

(2)

①『チャリヤーパダ』には「チャリヤー」と呼ばれる儀礼歌が47歌記載されているが、本来「チャリヤー」という用語は歌謡ジャンルの名称であって、その数は47に留まらず、おそらく「チャリヤー」と呼ばれる曲がプロダクティヴに無数に作曲されていたというのが実情だったと推定される。つまり、文献『チャリヤーパダ』に記載されないチャリヤー歌が、多数存在したと推定されるのだ。ネットワークが伝承するチャチャー歌群の中には、これらの記録されなかったチャリヤー歌が多く混ざっていると考えられる。その証拠として、歌詞の中で用いられる言語（アパブランシャ語や新期インド・アリア語の古形）の特徴は『チャリヤーパダ』のものに共通しており、また、『チャリヤーパダ』に用いられる特有の神秘主義的暗喩表現（隠語）が、チャチャー歌においても使用される。サンスクリットからインドの近代語に至る言語の歴史的発展における中間段階にあたる、アパブランシャ語や新期インド・アリア語古形が、文献として記録されているだけでなく、実際に声を出して歌われているという稀有な例である。

②「チャチャー歌」朗誦は、金剛乗の僧侶が極秘で執り行う儀礼（チャクラ・プージャー）の一環として行われる。この儀礼においては通常の社会理念では禁忌とされる肉食・飲酒が行われ、さらに儀礼的性交によってクライマックスを遂げる。秘密儀礼の奥義を凝縮したものがチャチャー歌の歌詞であるとされ、チャチャー歌は呪術的な力の極めて強い呪

文のようなものとされる。今日のネットワーク教徒が執り行う秘密儀礼においては肉食・飲酒のみを行い、儀礼的性交は実際行わずに、身振りや舞踊によって象徴的に代置されている。

儀礼的宴会がたけなわになると、チャチャー歌に合わせて舞踊が踊られる。踊り手は一座の長であるが、彼には神・神妃が憑依していると信じられている。チャチャー歌の伴奏によって踊られる神・神妃の踊りは金剛乗の奥義を表現しているとされる。この神秘的な舞踊においては神と神妃が抱擁し合一する様が舞踊のジェスチャーによって表現される。秘密儀礼において、参加者は神々の陶醉の世界を垣間見してしまうわけであり、それは、極めて危険なことでもある。そのため、部外者が、この秘密儀礼に参加し、チャチャー歌の演奏を聴いたり、神の舞踊を見たりすることは厳しく禁止されている。

調査者もまた、この例外ではなく、秘密儀礼への参加は認められず、また、チャチャー歌を録音する許可も得られなかった。しかし、伝承者であるインフォーマントの自宅を訪ね、レッスンを受けてチャチャー歌の歌唱法の手ほどきを受けることの許可を取り付けることができた。つまり、儀礼から歌謡だけを分離し、歌謡を純粋に音楽的な側面から分析し、また歌詞をテキストの内容的・言語的な側面から分析するという作業を行うことになった。儀礼には実際に参加することを許されなかったが、インフォーマントの自宅を毎日のように訪問しレッスンを受けるうちに、歌を習うだけでなく、それぞれの歌にまつわる伝説や、歌を作ったとされる金剛乗の伝説的な成就者たちについてのエピソード、儀礼における役割・宗教的意味などについての説明を聴くことができ、歌謡の歌詞の意味や言語的特徴だけでなく、金剛乗の秘密儀礼の実践について垣間見ることができた。また、時には、神と神妃の抱擁を表すジェスチャーを見せてもらえることもあった。

チャチャー歌は、インド古典音楽理論を遵守して作曲されている。つまり個々の歌についてラーガ（旋法）とターラ（リズム・サイクル）が決められている。ただし、ここで言われる“ラーガ”とは、現在インドで実践される古典音楽とは性格がいくらか異なっており、あらかじめ作曲され固定された楽曲を指し、現代のインド古典音楽の演奏のように即興をまじえることはない。チャチャー歌の“ラーガ”の構造には、北インド古典音楽（ヒンドゥスターニー音楽）の上行音階や下行音階に相当するパターンが認められることもあるが、まだ明確なことは言えない。ターラは、14拍子、7拍子、5拍子などのものが多い。ラーガにせよターラにせよ、チャチャー歌において用いられているものは、今日のヒ

ンドゥスターニー音楽とはかなり異なっている。おそらく、17世紀以前の古い段階のインド古典音楽がカトマンドゥに移入され、そのまま固定化したものと推定される。このように、チャチャー歌は民族音楽学的に見ても極めて興味深い事例である。

歌詞についていうと、作られた年代はさまざままで、一番古いものは、『チャリヤーパダ』第4歌、『ヘーヴァジュラタントラ』の2つの金剛歌、サラハパーダ成就者の作になるとされるドーハー（二行詩）である。これらの歌詞で用いられている言語はアプブランシャ語から新期インド・アーリア語東部諸語への移行段階を反映し、歴史言語学的に見て極めて貴重な言語資料である。この他にも、今まで知られている文献には見つからないが、古い段階の言語特徴を示す歌詞がいくつか存在する。たとえば『コーイレ・ヴァンシャー』という歌詞はそういったもののひとつである。この歌詞は、古い言語特徴を示すのみならず、内容的にも非常に興味深く、ハタ・ヨーガの身体論を扱っている。ハタ・ヨーガの身体論は『チャリヤーパダ』の様々な歌詞で言及されており、これらの修行歌を作詩した修行者たちが、ハタ・ヨーガ修行法を生み出したとされる中世の神秘主義集団ナータ派と深いかかわりをもっていたことを示唆する。

さらに『チャリヤーパダ』の歌詞に用いられる表現のパラレルは、中世ヒンディー語（アワディー方言）の神秘主義詩人カビールの歌詞にまで見出され、『チャリヤーパダ』の作者たち+ナータ派の修行者たち+カビールを始めとする中世の神秘詩人たち、という風に、9～12世紀に始まる修行歌の伝統とそこに歌われる神秘主義思想が、中世・近世を通じて、脈々と（そしておそらくは口承で）受け継がれていたことを示唆する。

チャチャーのうちの、新しい年代層に作られたと考えられる歌詞は、サンスクリット語の表現のなかに、古いチャチャー歌を模倣したと思われる古めかしい表現を散りばめる、という体裁をとる。時代が新しくなるにつれサンスクリットの表現の割合が多くなり、内容は、神々の服装や持ち物を描写するに終始するなど、古い歌詞に比べて、面白味に乏しくなっていく。中には、現代の僧侶がチャチャー歌を作詩したものもある。

インフォーマントの談によれば、金剛乗仏教の真髓を凝縮したものが秘密儀礼（チャクラ・プージャー）であり、さらに、秘密儀礼の真髓を凝縮したものがチャチャー歌であるという。チャチャー歌には、魔術的な力があり、究極的な解脱をもたらすだけでなく、現世的な利益（財など）をもかなえてくれるのだという。ネワールの金剛乗においては、儀礼を正しく執り行うことが重要視され、教

義を信者に説くことは、あまり行われない。インフォーマントとのインタビューの際にも、金剛乗の哲学や倫理観を、“教え”という形で説かれることはほとんどなく、インフォーマントの思想的スタンスは、様々な話題の四方山話～その多くはプ札ヴェートに関する事柄である～の中から、徐々に感じ取るしかなかった。むしろ、金剛乗の奥義は、チャチャー歌を繰り返し歌うことによって、おのずと歌い手に開示され、体得される、と考えているようであった。

インフォーマントによれば、金剛乗は、ネワール文化の真髓・核に当たるものであるという。インド文献学研究においては、ネワール仏教を、インド東部から伝わり、金剛乗の古い状態を良好に保存しているという観点からインド後期密教の一段階に過ぎないものとして研究することが多い。つまり、ごく周縁的な位置しか与えられていないが、当のネワール人本人たちにとっては、自らの民族文化が依って立つ基盤なのである。つまりこれは、チベット・ビルマ語族に属するネワール族のアイデンティティーが、インド伝来の金剛乗を拠り所とし、さらに、金剛乗の真髓は、純正語サンスクリットではなく、むしろアプブランシャ語や新期インド・アーリア語など、インドの俗語による修行歌に凝縮されている、ということの意味し、非常に含蓄深い。

ネワールの伝統文化においては飲酒や肉食はタブーではなく、大っぴらに行われ、それには女性も参加している。だから、それらを儀礼として行う金剛乗の秘密儀礼は、ネワール人には、さしたる抵抗もなく受け入れやすかったのではないかと考えられる。

したがって、ネワール人にとっての金剛乗の秘密儀礼は、この儀礼が起源的にはそうであったといわれるところの“反社会的なタブーを敢えて犯す儀礼”ではもはやなく、むしろ、贅沢な食事（飲酒・肉食）をしながら歌舞音曲を楽しむ娯楽の祭礼として機能したように思える。この点においても、秘密儀礼はネワール文化の粋を集めた祭礼であると考えることができる。

このように、チャチャー歌は、インド東部の民衆文化に育まれた新期インド・アーリア語の修行歌が、周縁部の非アーリア人であるネワール人のアイデンティティー獲得を促したという、まことに興味深い事例であるといえる。

チャチャー歌の写本の他にも、カトマンドゥ盆地には、演劇写本が多数保存されている。これらの演劇写本の多くはインド東部の言語（ミティラー語、ベンガル語）を用いて書かれたものである。つまり、チャチャー歌だけでなく、他の文芸ジャンルにおいても、インド東部からの影響は、ネワール族独自の地

方文化の形成に大きな役割を果たしたといえるが、そのことの十分な調査検討は、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

① Makoto Kitada, Kashinath Tamot, A newly discovered fragment of the Srikrisnakirtan, Tokyo University Linguistic Papers 33(2013), 査読有 293-300

② 北田信, 8人の女たち 古典ネワール語の抒情詩、総合地球環境学研究所プロジェクト H-03 環境変化とインダス文明 2010-2011 年度成果報告書、査読無、(2012)、135-141

③ 北田信, 千年前の歌声(続) カトマンドゥ盆地のチャチャー歌、南アジア古典学、査読有、5巻、(2010)、161-176

④ 北田信, 中期ベンガル語の韻律について、総合地球環境学研究所プロジェクト H-03 環境変化とインダス文明 2009 年度成果報告書、査読無、(2010)、155-159

⑤ 北田信, 千年前の歌声～チャルチャーパダとカトマンドゥのチャチャー歌伝承、南アジア古典学、査読有、4巻、(2009)、205-232
北田信, 放浪者の言語～チャルチャーパダの過去形、印度学仏教学研究、査読有、58巻第1号、(2009)、314-317

[学会発表] (計6件)

① 北田信, カトマンドゥ盆地に保存されるベンガル語・ミティラー語演劇写本、南アジア学会第25回全国大会、2012.10.7、東京外国語大学

② 北田信, ベンガルの文芸とイスラーム、南アジア学会第24回全国大会、2011.10.2、大阪大学

③ 北田信, ヘーヴァジュラタントラの金剛歌とカトマンドゥの音楽、日本印度学宗教学会第53回学術大会、2010.5.30、大阪国際大学

④ 北田信, 千年前の歌声～新期インド・アリア語の修行歌集とカトマンドゥの口頭伝承、南アジア学会第22回全国大会、2009.10.3、北九州市立大学

⑤ 北田信, 放浪者の言語～チャルチャーパダの言語学的諸問題、印度学仏教学会第60回学

術大会、2009.9.8、大谷大学

⑥ 北田信, A frog chases a serpent: The deciphering the Caryapadas, 14th World Sanskrit Conference, 2009.9.3, 京都大学

[図書] (計1件)

① Hiroko Nagasaki, Makoto Kitada ほか(共著), Indian and Persian Prosody and Recitation, Saujanya Publications, (2012), 193-227, 327-341 担当

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北田 信 (KITADA MAKOTO) 大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：60508513

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし